

自立した生活者を目指して



大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員

豊田 尚吾 | Toyota Shogo

■大阪大学経済学部卒。1985年大阪ガス(株)入社。(社)日本経済研究センター、コロンビア大学東アジア研究所、経営調査部等を経て、98年10月より現職。2002～03年度学習院大学経済学部特別客員教授(出向)。博士(国際公共政策)。研究領域は主にエネルギーと環境問題、生活経済、消費者行動論、マーケティング・コミュニケーション。主な著作に「真のグローバル・スタンダードとは」(1998年、東洋経済高橋亀吉記念賞優秀賞)、「地域通貨制度が拓く情報多消費型取引の可能性」(1999年、第5回読売論壇新人賞佳作)など。

1. はじめに

昨年制定された消費者基本法は、「消費者基本計画」の作成を規定していた。それを受け、平成17年からの5ヶ年を対象とする計画が本年4月8日に閣議決定された。そこでは「消費者の安全・安心の確保」「消費者の自立のための基盤整備」「消費者トラブルへの機動的・集中的な対応」を基本的な方向とし、消費者団体訴訟制度の導入や消費者教育の推進体制強化などの施策が盛り込まれている。また、消費者基本法の理念を受け、計画法でも消費者の自立支援が強調されている。

本稿では、これまでの連載内容を整理した上で、自立した生活者になるために、生活戦略が必要であることを論ずる。以下、第2節では改めて生活戦略的な考え方は必要かと問い直す。その上で、生活充足を望み、生活破綻を避けたいというニーズがあるならば、戦略的な考え方が有効ではないかと述べる。第3節、第4節では、本連載の主張のまとめを行う。第3節は発想編とし、生活充足に不可欠なものの見方や評

価に関し、問題意識を持つことの重要性、2次元思考のすすめ、相互依存関係の認識の3点をポイントとして述べる。第4節では、実践編としてライフスタイルの確認作業、長期計画の策定、リスクマネジメントの必要性を論ずる。最後に、自立を目指す生活者と生活戦略の関係性を主張し、本連載を締めくくる。

2. 生活に戦略は必要か

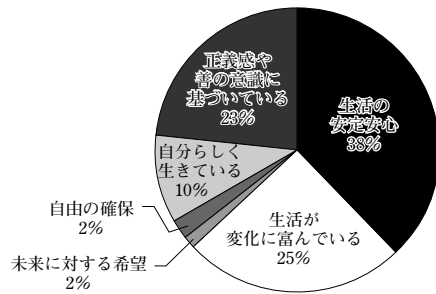
本連載のタイトルは「生活戦略論」であり、文字どおり、生活に戦略が重要であると提案することが目的であった。ここで今一度、生活戦略は必要であるかと問い直してみたい。その前に、戦略という言葉は、多方面でかなり曖昧に利用されているため、本稿での定義付けしておく必要がある。『意思決定論』(宮川公男著、中央経済社、2005年)には以下のような言及がある。“ウエーベル元帥は…「戦術とは戦場において軍隊を動かす技術であり、戦略とは戦場の有利な地点へと軍隊を動かす技術である」としているが、著者はこれが最も明確な定義であ

と思う (P.307)”。この文脈で言えば、生活戦略とは、そもそもどんな生活が自らの充足感を高めるのかを考えた上で、そのためには何をすればよいかに取り組むことである。戦略の中身には、自らの価値観（価値評価構造）の確認、長期的な生活設計、生活資源を得るための自身のポジショニング分析、リスクマネジメントの姿勢などが含まれる。生活者が生活を営む上で、何をどのように買うか、あるいは廃棄するかなどは、ここでは戦術の範囲に入るものとする。

そうであるならば、企業における経営の戦略性と生活戦略の違いも明らかになってこよう。企業にとって、利潤極大化とともに、組織としての持続性確保は最も重要な目的のひとつである。一般の企業は、経営状態が芳しくなければ、その存在自体が否定される（いわゆる、破綻を来す）。それを避けるためには、その場しのぎの戦術では不十分で、大局的な観点からの戦略性が必要となる。一方、生活者における持続性は、福祉社会の名の下に、一定の水準は保証されている。失業保険もあれば、年金もある、生活保護というセーフティネットも一応制度化されている。その意味で、企業で言うところの破綻、倒産といった事態は、生活を営む上ではイメージしにくいのかも知れない。

しかし、それでも生活に戦略が必要であるというのが、本稿での主張である。もし生活の充足感を高めたい、あるいは低めたくないというニーズがあるならば、そこに戦略性が必要になる。前号でも紹介した生活意識調査から、生活の充足に関するデータを紹介しよう。ここでは、生活の充足度について回答を求めた。単に生活全般だけでなく、「生活の安定や安心」「生活が変化に富んでいる」なども同時に尋ね、それらを全般的な生活充足の「要因」と仮定した。そ

図1 生活の充足度（要因分解）



して、生活全体の充足度を各分野の充足度で分解するという方法をとった。これは飽戸他『ゆとり時代のライフスタイル』（日本経済新聞社、1989年）の分析を参考にしている。

その結果、調査回答者の、生活満足度における各要因の影響力は図1のようになった。80年代に行われた飽戸の分析と比較すると、「生活の安定や安心」「生活が変化に富んでいる」「自分なりの正義感や善なる心に基づいた生活をしている」という要因の重要度が増大している。

このように生活の充足度というものを意識し、それを高めたいとの動機付けがあるならば、戦略的取り組みの必要性が増してくるだろう。特に、生活における安心や安全が脅かされているという問題意識は連載中、再三繰り返してきた。図1にもそれと整合的な結果が現れている。生活リスクは自己破産などの生活破綻を連想させる。既に述べたように、冒頭に紹介した消費者基本法では「消費者の権利の活用」とともに「消費者の自立の支援」が2大基本理念となっている。消費が生活者の重要な部分であると考えれば、生活者にも自立した態度や行動が求められる時代になりつつあると理解してよい。その際、消費者あるいは生活者に「なる」という発想が必要になる。今までは、普通に生きていれば消費者であり、生活者であった。自立した

生活者が求められる時代には、勝手に生活者になることはできず、一定の努力や教育といったプロセスが不可欠になる。その際、生活戦略的な発想やアプローチが役立つのではないだろうか。そこで、次節からは、本連載を通じて主張してきたことを再構成し、改めて生活戦略の必要性を訴えることとしたい。

3. 生活戦略論まとめ (1)

〈問題意識を持つ〉 — 理想を持たねば問題は見えてこない —

何より生活の充足に関する問題意識を持つことが第1である。マーケティングなどでもしばしば論じられているように、問題とはあるべき姿(理想)と現実とのギャップである。そうであるならば、生活充足に関するあるべき姿、理想を持っていなければ、問題自体認識できないことになる。結局、生活者自身が問題を発見しようという意識を持てるかがポイントになる。その際、問題意識を持つに当たっての助けとして、2次元思考と相互依存関係認識という2点を提案する。

〈次元思考に努める〉 — 評価軸を2つ持てば、視点が一気に広がる —

生活充足を考える際に、強調したいのは次元思考である。その基礎となるのが2次元思考となる。最近、「〇〇する人、しない人」といった二分法的考察方法が、書籍を含めよく目に付く。複雑化した世の中で、分かりやすい議論を行うという意図は理解できるし、その意義も認める。一方で、それだけでは非常に片寄ったものに見方になってしまうことにも注意しなければならない。自立を目指す生活者は、より現実的な(複雑な)世界を理解するための努力も必要であ

る。そうでなければ、本連載1回目の勝ち組負け組論で述べたような、生産的でないグルーピングを行ってしまい、不要な優越感や劣等感を持つことになる。これは生活充足のための大きな障害となる。評価の軸を増やすことで、安易な優劣関係での現状把握を避けることができる。

勿論、二分法的な考えの、分かりやすさというメリットは捨てがたいものがある。そこで一気に多次元の世界に踏み込むのではなく、まずは2次元(勿論、2次元も多次元のひとつである)から始めましょうという提案を連載第4回で行った。2次元思考の良い点は、平面図で表すことができるという意味で理解が容易でありつつ、評価軸が2つになることで、世界が線から面に広がることにある。そうすれば、単純な“AよりBの方が良い”という評価は通用しなくなる。そこでの生活充足上の利点は、既存の、あるいはステレオタイプの評価基準に捉われることなく、自分なりの概念世界を作ることができるようになることである。

〈相互依存関係の認識〉 — 成果は自分の力だけでなく、周りの方々のお陰でもある —

連載第2回でポジショニング(位置付け)の重要性を論じた。そこでは自分の、社会における価値は、自分だけで決まるわけではなく、他者との相対関係によって左右される部分があることを述べた。言い換えれば、自分と他者が相互に影響を及ぼし合っていること(相互依存関係)を意味する。2次元思考が、外部世界の自分なりの認識枠組みの構築であるとするならば、相互依存関係の認識は、その枠組みの中の、各要素の関係に関わる理解である。特に、自分自身をその枠組みに位置付けることによって、自分のポジショニングを明確にしつつ、自らが

他者に助けられて存在していることを理解できる。これはその後の生活設計に大きな影響を与えるだろう。

4. 生活戦略論まとめ (2)

<ライフスタイル> — 生活価値の把握 —

生活充足を求めるのであれば、まず自分にとって何が「大事か」を知る必要がある。つまり、自身の理念や価値観の把握が課題となる。それが場合によっては前節で述べた次元（評価軸）のひとつになり得る。生活に関する価値観を捉えることに関し、ここではライフスタイルの理解と関連付けて考えてみよう。連載第5回では、ライフスタイルを因子分析を用いた方法で論じた。ここでは、前出の生活意識調査で得られた

知見の一部を紹介する。ライフスタイルの軸に関して、一般に公開されている方法論のひとつに飽戸他（1989、既出）の分析がある。しかし、これは80年代に行われたもので、かなりの時間が経過している。そこで、その構成概念がどの程度現在でも通用するのか、修正すべき点はどこかについて調べてみた。

飽戸他（1989）で用いられた質問群と、そこから得られた因子は表1のとおりである。これとほぼ同じ質問群で本年行った結果は表2のようになった。そこにもあるように、質問の表現を若干変更したため、その影響があることは否定できない。それを踏まえた上で、表1と表2の比較をすると以下ようになる。まず、人生享受、積極主流、伝統志向に関しては、今回も

表1 一般的価値類型の5つの次元

I 人生享受
1. 経済的に恵まれていなくても、気ままに楽しく暮らせばよいと思う
2. 人は世間の目など気にせず、好きな人生を送るのがよいと思う
3. あまり収入はよくなくても、やりがいのある仕事をしたい
4. 出世よりは、自分の人生をエンジョイする生活を送りたい
II 積極主流
5. リーダーになって苦勞するよりは、のんきに人に従っている方が気楽でよい
6. 小さい頃から、お山の大将になるのが好きな方だった
7. 少し無理だと思われるくらいの目標を立てて頑張るほうだ
III 伝統志向
8. 家族がうまく行くためには、自分の気持ちをおさえる方だ
9. 自分のことを考える前に他人のことを考える方だ
10. 古いものは、長い間ずっと受け継がれ残ってきたという良さがあるのだから、できるだけ残そうとする方だ
IV 自己充足
11. 自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが、本当の生き方だと思う
12. 仕事であまり認められなくても、趣味やレジャーで他人から尊敬されればよい
13. 配偶者以外でも、本当に愛し合える異性がいたら、性交渉を持ってよい
14. 結婚しても、必ずしも子供を産む必要はない
V 自己犠牲
15. 家族のため、会社のため、自分が犠牲になって頑張るのは、すばらしいことだ
16. 頑張って出世してから、本当に自分のやりたいことができるのだと思う

資料) 飽戸・松田『「ゆとり」時代のライフスタイル』(日本経済新聞社, 1989年)、43頁の表を基に作成

表2 生活意識調査(2005)での結果

	人生享受	積極主流	伝統志向	自己充足?	自己犠牲?
1	0.578	0.002	0.078	0.018	-0.056
2	0.541	0.060	-0.088	0.066	0.036
3	0.442	0.150	0.232	0.007	-0.239
4	0.477	-0.171	0.033	0.137	-0.362
5	0.404	-0.518	0.042	0.093	0.023
6	-0.029	0.509	0.056	0.141	0.164
7	0.097	0.697	0.121	-0.006	0.083
8	0.061	-0.078	0.570	-0.062	0.066
9	-0.019	0.096	0.481	-0.009	-0.020
10	0.049	0.207	0.253	-0.135	0.010
11	0.487	0.016	-0.185	0.008	0.295
12	0.481	-0.124	0.094	0.093	0.004
13	0.103	0.075	-0.123	0.326	0.284
14	0.093	0.010	-0.062	0.431	-0.100
15	0.032	0.110	0.392	-0.085	0.329
16	-0.079	0.152	0.236	-0.056	0.468

因子抽出法：主因子法

※下表のように若干質問の表現を変えた

4	出世よりは、自分の人生を楽しむ生活を送りたい
6	小さい頃から、リーダーになって仕切るのが好きな方だった
10	古いものは、長い間ずっと受け継がれ残ってきたという良さがあるのだから、できるだけ尊重する方だ
11	自分の欲求にできるだけ忠実に生きるのが、本当の生き方だと思う
13	配偶者以外でも、本当に愛し合える異性がいたら、恋愛関係になってもよい
15	家族のため、社会、会社などのために、自分が犠牲になって頑張るのは、すばらしいことだ
16	頑張って社会的地位を得てから、本当に自分のやりたいことができるのだと思う

同様の因子として抽出された。一方、自己充足、自己犠牲は、飽戸他（既出）とは異なる結果となった。

自己充足に関しては、「欲望に忠実に生きる」と「趣味で尊敬されればよい」は人生享受因子の中に入り、配偶者との関係や、子供を持つか否かの選択とは異なるグループとなった。確かに、筆者としては当時の自己充足の概念は、現在見ると若干違和感を感じる。家族のあり方に関しては、考え方の変化が激しい分野であり、このような結果になったのも当然と言えるのかも知れない。また、後者の自己犠牲に関しては、「家族、社会、会社のために犠牲になる」という考えが、伝統志向と、より大きな関係を持っていることが分かる。それほど遜色ない水準で、自己犠牲因子とも関係があるので、構成概念が大きく変化したとは言えない。しかし、これも現在の我々から見れば、家族のために犠牲になるのは伝統的な考え方と言えるかもしれない。因みに、連載第9回で紹介したインターネット調査でも同じ質問を行っており、ほぼ同じ結果を得ている（自己充足因子の分裂、伝統志向因子と自己犠牲因子の混乱）。このことから、既述の理解にも一定の頑健性があると考えられる。

以上のように、幾つかのライフスタイルのパターンに個人を分類し、その人が相対的にどの

ようなライフスタイルなのかを示すことができる。今後、生活向上施策を考える上でもライフスタイルのあり方が一層重要になるものと予想している。万能ではないものの、場合によっては生活設計の際に有益な情報となるはずだ。

<長期計画を立ててみる> — 近視眼を補う計画設計 —

第2節で述べた戦略を考える上で不可欠なのが、ライフイベントを踏まえたキャッシュフロー表の考え方である。これはファイナンシャルプランの一手法で、キャッシュという視点からのみ長期計画を論じているという点で十分とは言えない。連載第3回では、それを利用した複数次元尺度での資産評価などの考え方を提案した。それはともかく、長期的、鳥瞰的な視点を生活の中に取り入れるということは戦略的発想と直結する。我々は往々にして、合理性から逸脱した判断を行うことが知られている。合理性がすべてではないものの、うまく活用すべき特質であることは間違いない。計画を立てることは、自らの合理性を確認しながら行う作業でもあり、自分が見落としていた部分を気づかせてくれる。

また、万が一のことが起こった時にこの表がどう変化するかを見ることで、生命保険などで確保すべき額を計算するという、万一時キャッ

表3 万一時キャッシュフローのイメージ

年齢			支出			収入			年度収支	必要額 (A)	一時性費用 (B)	必要補償額 (A)+(B)	準備済資金			準備 不足額
本人	配偶者	子	生活費	住居費	...	遺族年金	配偶者収入	...					生命保険	金融資産	...	
35	33	2	200	100	...	180	80	...	-120	7500	300	7800	5000	200	...	2100
36	34	3	200	100	...	180	80	...	-120	7380	300	7680	5000	210	...	1970
37	35	4	220	100	...	180	80	...	-140	7260	300	7560	5000	220	...	1840
38	36	5	250	110	...	180	80	...	-160	7120	300	7420	5000	230	...	1690
39	37	6	250	110	...	180	80	...	-180	6960	300	7260	5000	240	...	1520
40	38	7	270	110	...	180	80	...	-200	6780	300	7080	5000	250	...	1330
41	39	8

資料) ソニー生命保険(株) 青野文雄氏の講演を参考に作成

シュフロー表（表3）というものもある。勿論それはひとつのシナリオに過ぎないが、ベース（ベンチマーク）が出来ることによって、状況が変化した場合にも柔軟に対応する力を養える。これら様々なスキルを活用することで、より利用価値の高い生活設計が実現可能になる。

<リスクマネジメント力を付ける> — 今後の大きな課題 —

生活破綻のリスクに関し、筆者が真っ先に思い出すのが詐欺である。最近ではワンクリック詐欺（特定のサイトにアクセスした途端、偽の料金請求画面が表示され、本来不要な支払いを誘う詐欺）といったことが話題になるなど、新手法の詐欺手法が次々と出現している。生活意識調査において、詐欺の経験を尋ねたところ、実際に詐欺にあった経験者は1,034人中、22人（2.1%）と多くはなかった。しかし、未遂に終わったが詐欺を経験した（26人、2.5%）、電話勧誘など、詐欺と思われる勧誘を受けた（134人、13%）を合わせると、17.6%になり、決して希少な経験とは言えなくなる。また、同様の質問をネット調査での回答で見ると、実際に詐欺にあった経験者は1,073人中、41人（3.8%）、未遂に終わったが詐欺を経験した（51人、4.8%）、電話勧誘など、詐欺と思われる勧誘を受けた（281人、26.2%）と倍増し、合計34.8%の人たちが何らかの詐欺経験を回答している。やはり、最近の詐欺・リスクと、ネットというものの深い関連を示唆しているのであろう。

このような中、連載第9回で論じたように、生活者の意思決定とリスクに関しては、まだまだよく分からないことが多い。ただ様々な知見が蓄積されつつあることは確かである。ヒューリスティックス、リスク下の意思決定方法、返

報性や互酬性などの社会心理学的テーマとマーケティングなど経済経営的事象との関係論…。これらはまだ実用的なノウハウとして確立していない。しかし、結論をもう一度確認したり、意思決定の理由付けを文章にしたりすることで、合理性を取り戻せる場合があることも知られている。このような、不適切なヒューリスティックスを避ける手段の啓発などを通じて、生活の充足に資する方略を提案することの可能性に期待したい。

5. 最後に

以上、紙幅の都合で捨象してしまったものもあるが、本連載を通じてのまとめを行った。第2節で見たように、生活充足には安定や安心、変化、自らの価値観との整合性などが大きな影響を及ぼしている。それらを高めるためには、問題意識を持ち、偏らない視点で、周囲や自分の相互依存関係を認識することが前提となる。その上で、価値観に従った生活設計を構築し、その運営の障害となるリスクを管理していく姿勢が必要である。それを称して、ここでは生活戦略的態度と呼んでいるとご理解いただきたい。単に金持ちのお父さんになるだけでは不十分だということが、本連載を通じての主張である。

体系的な議論が目的ではなく、関心を持たれるであろうトピックスを基に、内容を構成した。そのため個人の方略利用技術と、生活充足向上の政策論などが混在し、雑駁な内容の連載となってしまったことはお詫びしたい。しかし、もしこの連載を通じて、金持ち○さんのような生活戦術とは異なるものの見方もあるのではないかと感じていただければ、それは筆者にとってありがたいことであり、拙稿を積み重ねた意味もあったと言える。